

奄美大島、徳之島、沖縄島北部における観光管理の概要

1 沖縄島北部

(1) 観光の現状と課題

沖縄島北部の観光利用状況については、主な観光施設や人気地点の年間利用者数は各施設等で個別的に把握されているが、本地域全体の入込者数の推移については、統計的な数値を持ち合わせていない。将来的に、沖縄島北部全体の観光動向の推移等を的確に把握できるよう、指標となるデータの取得方法についての検討が必要である。

沖縄島北部において、利用状況が把握されている遺産地域内外の主な利用地点と新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受ける前の2019年^{※1}の利用状況は以下に示すとおりである。なお、2020年以降はコロナ禍の影響により来訪者数の落ち込みが大きいが、コロナ終息後の増加可能性を想定し、現在の取組を進めるとともに、その動向を把握していく必要がある。

沖縄島北部では、遺産地域内での利用箇所は現時点では限定的であり、利用者数も低いレベルに留まっていると考えられるが、沖縄島北部3村にまたがる広域的な遺産地域の利用実態に関しては十分なデータがないことから、現状における利用地点を中心として、入込客数が的確に把握できる体制を整える必要がある。特に、林道へのアクセスが比較的容易であることや公道外への車両乗り入れ等については十分に注視する必要がある。

表 沖縄島北部における2019年^{※1}の利用状況

地域全体	遺産地域内	遺産地域外
※地域全体の利用動向の把握が課題	①与那覇岳(約2,500人) ②伊部岳(約500人) ③玉辻山(※未測定：カウンター設置に向けて準備中)	①辺戸岬(380,424人) ②国頭村森林公園(14,032人) ③比地大滝(31,047人) ④ヤンバルクイナ生態展示学習施設(19,801人) ⑤奥やんばるの里(4,226人) ⑥やんばる学びの森(18,894人) ⑦やんばる野生生物保護センター(11,702人) ⑧やんばるの森ビジターセンター(※2020年2月供用開始のため、2020年度から集計) ⑨ター滝(33,989人) ⑩山と水の生活博物館(12,401人) ⑪村民の森つつじエコパーク(51,024人) ⑫福地川海浜公園(15,934人) ⑬ふれあいヒルギ公園(88,009人)

(2) 観光管理の基本方針

沖縄島北部では、包括的管理計画によって示された「地域ごとの観光の実情を踏まえた観光管理計画を策定する」という基本方針に基づき、沖縄島北部部会において2020年2月に「沖縄島北部における持続的観光マスタープラン」が策定された。

沖縄島北部では、現在、以下に示した本計画の基本方針にしたがって多面的な取組を進めているが、特に遺産地域、緩衝地帯、周辺管理地域のゾーニングを踏まえた来訪者管理については、③、④の方針にしたがって実施している。

○「沖縄島北部における持続的観光マスタープラン」における観光管理の基本方針

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 地域住民への持続的観光への理解醸成② 世界自然遺産登録が地域経済の持続的発展・地域社会の課題解決へ寄与する仕組みづくり③ <u>やんばる森林ツーリズムを中心とした遺産地域や緩衝地帯での適切な来訪者管理の実現</u>④ <u>周辺管理地域を中心とした観光と3村周遊への計画的誘導</u>⑤ 持続的観光の推進を担う人材育成や組織（観光協会等）の運営能力・観光管理能力の強化 |
|--|

遺産地域及び緩衝地帯での来訪者管理については、これまでは2019年3月に「やんばる3村世界自然遺産推進協議会」によって策定された「やんばる森林ツーリズム推進全体構想」の考え方に基づいて実施してきたが、その後のガイド制度に関する方針変更や世界自然遺産登録を踏まえて、現在、内容の一部見直しが必要になっている。

ガイド制度に関しては、既に、3村共通ルールの上に、それぞれの実情に合わせた運用を考慮した見直しが行われており、国頭村では2020年度に「国頭村公認ガイド利用推進条例」が制定され、2021年度から施行されており、大宜味村及び東村もそれぞれ独自の制度化に向けた検討が進められている。

世界自然遺産登録を受けた動きとしては、2022年5月に本構想の策定主体が「やんばる3村世界自然遺産協議会」に改名した際に、本構想の実行組織である「森林ツーリズム部会」も「やんばる3村観光協議会」を事務局とする新体制に移行している。

こうした状況を踏まえて、本構想については、ガイド制度の現状を反映させるとともに、今後懸念されるコロナ終息後の来訪者数の増加や利用形態の変化等を念頭に置き、利用実態把握調査のデータに基づく利用フィールドの見直し・再整理と、遺産地域、緩衝地帯、周辺管理地域のゾーニングとに応じた実効性のある来訪者管理の仕組みについて、2022年6月から「森林ツーリズム部会」による再検討が始まっている。

(3) 主な取組状況

① 遺産地域及び緩衝地帯における利用の抑制・適正化（3村連携）

- ・ 夜間道路適正利用の検討

過年度に実施した林道の夜間通行止め実証実験の効果検証等を行い、より効果的な密猟対策・ロードキル対策等の実施のため、夜間道路通行規制の手法や運用等について検討を

行う。

- ・「やんばる森林ツーリズム推進全体構想」の見直し

森林ツーリズム部会において、ガイド制度及び世界遺産登録後のゾーニングや利用実態に即した実効性のある来訪者管理の仕組みの再構築に向けて、「やんばる森林ツーリズム推進全体構想」の見直しを行う。

- ・利用実態把握調査の実施

やんばる 3 村世界自然遺産協議会において、コロナ終息後の来訪者数の増加や利用形態の変化等を念頭に置いて、遺産地域及び緩衝地帯を中心とした利用実態把握のための調査を実施する。

- ・サステナブルな観光コンテンツ強化モデル事業

密猟・盗掘の抑止・防止を目的として、沖縄島北部 3 村の地域住民有志や国頭村森林組合が環境省との連携・協力により継続的に実施してきた林道パトロールと生物調査の取組を、新たに観光コンテンツとして来訪者に提供することで、観光を森の保全活動につなげていく。

② ガイド制度・ガイド育成（各村）

- 国頭村：「国頭村公認ガイド利用推進条例」の運用

2021 年に施行した条例に基づくガイドの登録・認定及び養成の継続的实施

- 大宜味村：「大宜味村エコツーリズム推進全体構想」の作成・認定に向けた検討

利用集中がみられるター滝への立入人数制限を含む利用ルール設定とルール遵守の仕組みづくり

「大宜味村「黄金人（クガニーんちゅ）プロジェクト」の推進

大宜味村内での自然・文化資源の価値を伝えるガイドの人材育成の仕組みづくり

- 東村：「東村ガイド条例（仮称）」の制定に向けた検討

東村内のガイドを対象とした登録・認定制度の検討を進め、2022 年度中の条例制定を目指す

③ 周辺管理地域への利用誘導（3 村連携＋各村）

- ・世界自然遺産ブランディング事業

- 国頭村：SDGs を取り入れた民泊体験の商品化及び大宜味村・東村への展開、県外修学旅行への営業

- 大宜味村：やんばる地域における観光資源等を生かし、先進地事例をもとにガイディング手法の検討、および周辺誘導ツールの制作

- 東村：3 村内の周遊につなげるためのデジタルパンフレットの整備

2 奄美大島・徳之島

(1) 観光の現状と課題

奄美大島と徳之島において、利用状況が把握されている遺産地域内外の主な利用地点と新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受ける前の2019年^{※1}の利用状況は以下に示すとおりである。地域全体の入込者数は、2015年から2019年までの間に増加しているが、「奄美群島持続的観光マスタープラン」（推薦書P204, Annex 5-40）に沿って、観光利用による自然環境への負荷を低減し、利用を分散させることに努めている。

なお、2020年以降はコロナ禍の影響により来訪者数の落ち込みが大きいですが、コロナ収束後の増加の可能性を想定し、現在の取組を進めるとともに、その動向を把握していく。

表 奄美大島における2019年^{※1}の利用状況

地域全体	遺産地域内	遺産地域外
入込者数は、2015年～2019年までの間に約1.3倍増加 （約42.3万人→約53.0万人） ※2020年入込客数は31.4万人	①湯湾岳（※3,000人弱 ※大和村側、宇検村側合計、一部欠損あり） ②金作原1,185台（※4～12月） ③瀬戸内中央線（※未測定：カウンター設置に向けて準備中）	①あやまる岬（89,309人） ②奄美パーク（129,000人） ③奄美自然観察の森（19,041人） ④大浜海浜公園（62,333人※平成31年 ^{※2} 数値） ⑤奄美野生生物保護センター（10,484人） ⑥奄美フォレストポリス（14,711人） ⑦黒潮の森マングローブパーク（91,931人）

表 徳之島における2019年^{※1}の利用状況

地域全体	遺産地域内	遺産地域外
入込者数は、2015年～2019年までの間に1.1倍の増加約（約13.0万人→約14.4万人） ※2020年入込客数は約8.1万人	①林道山クビリ線（143台 ※2019年5月～2020年3月。夜間のみ） ②井之川岳 ③天城岳 （②と③は未測定 ※2020年12月よりカウンター設置）	アマミノクロウサギ観察小屋（209人）

※1 「年度」の誤り（2022年12月訂正）

※2 「平成30年」の誤り（2022年12月訂正）

(2) 観光管理の基本方針

奄美大島と徳之島においては、鹿児島県が2016年3月に策定した「奄美群島持続的観光マスタープラン」に基づいて、国、県、市町村、民間団体等が連携して、利用ルールや施設整備など持続的な観光のための取組を実施している。

マスタープランは、「観光スポットごとの特性に応じた利用の計画的誘導」、「遺産登録効果の群島全体への波及」、「質の高い観光の実現と利用者満足度の向上」を目標として掲げている。マスタープランのコンセプトは、見込まれる観光客数の増加による負の影響を回避するため、観光客を収容規模の大きさや自然環境の状況等に応じて、観光スポットに適切に誘導することにより、計画的な観光客の流れが作り出されるようにするというものである。

現在、マスタープランに基づき、後述のとおり、奄美大島と徳之島の保護上重要な地域における利用ルールの検討・運用をすすめるとともに、遺産地域外では多人数利用が可能な施設やロングトレイルの整備・活用を図るなど、適正な利用や、利用の分散を目的とした取組が進められている。これらの取組を進めながら、利用状況を把握するためのモニタリングにも取り組んでおり、今後も継続し、その結果を踏まえて、さらに必要な取組を検討していく。

(3) 主な取組状況

①遺産地域及び緩衝地帯における利用の抑制・適正化

奄美大島と徳之島の保護上重要な地域において、多人数利用等による自然環境への負荷を軽減するとともに、質の高い自然体験の提供を図るため、利用ルール等を定め、暫定的に運用している。利用ルールは、地域の関係行政機関や民間団体等で構成される会議等において議論し定めている（奄美大島：金作原（奄美大島利用適正化連絡会議において策定，2019年2月開始），市道三太郎線周辺（奄美大島三太郎線周辺における夜間利用適正化連絡会議において策定，2020年10月開始），湯湾岳（2022年度中開始予定），徳之島：林道山クビリ線（徳之島利用適正化連絡会議において策定，2019年7月開始），剝岳林道及び三京林道（林野庁，天城町，徳之島エコツアーガイド連絡協議会による協定を締結，2019年4月開始）。利用ルール等には、地域に応じて、認定エコツアーガイドの同行義務付けや同時間帯に利用できる車両台数の制限等が含まれる。運用開始後も定期的に利用適正化連絡会議等において議論し、利用状況を踏まえながら、利用ルールの内容を強化するなどの改定を行っている。利用状況については、カウンターによる利用状況のモニタリングや現地調査等により把握している。

利用ルール等の認知度を上げるため、観光連盟・協会、旅行会社、レンタカー会社の協力も得ながら、WEBやチラシ等を活用し、利用ルールの周知に努めている。

また最近では、徳之島において、ロードキル等の環境への負荷を少なくするために、ナイトツアーの形態を車利用から徒歩へ切り替えていくことを狙ったウォークイベント等も行っている。

②ガイドの育成

奄美大島と徳之島では、2017年にエコツーリズム推進法に基づく「奄美群島エコツーリ

ズム推進全体構想」が策定され、「奄美群島エコツアーガイド認定制度」の運用が開始された。国、県、地元市町村で構成する奄美群島エコツアーリズム推進協議会が、奄美群島の自然・文化について深い知識や哲学を有し、来訪者に安全で質の高い体験を提供するとともに、地域の環境保全に責任を持つガイドとして、認定エコツアーガイドを認定している。2020年4月からは、認定エコツアーガイドの技術向上のために、認定後3年目に更新講習を受け、一定の要件を満たさないと、更新されないようになった。認定エコツアーガイドは、ガイドをするだけでなく、利用ルールの運用や環境保全のための普及啓発等において、関係機関等と連携している。2022年4月時点で奄美大島では91名、徳之島では19名が認定されている。

また、改正通訳案内士法に基づく「奄美群島地域通訳案内士育成等計画」に沿って、2015年から外国人観光客の受け入れを担う奄美群島地域通訳案内士の育成が進められており、2022年4月時点で、114名が登録されている（英語87名、中国語27名）。

③周辺管理地域への利用誘導

観光利用による自然環境への負荷を低減し、利用を分散させるための取組として、観光拠点施設の整備の取組も進めている。

具体的には、遺産地域外において、利用者に対する普及啓発、観光管理及び環境保全の拠点として、世界遺産センターの設置（奄美大島：2022年7月開館、徳之島：2023年度に着工、2024年度以降に開館予定）や気軽に自然を体感できる場所として奄美自然観察の森の再整備（2022年10月開館）等を行っている。

また、奄美大島と徳之島をはじめとする奄美群島内の有人島において、長距離自然歩道「世界自然遺産 奄美トレイル」を設定した（2021年1月全線開通）。奄美大島及び徳之島では、基本的に遺産地域外を通っている。このトレイルは、奄美群島ならではの自然や、人と自然が共生してきた文化を体験できるルートを選んでおり、各地で観光や地域のウォーキングイベントにも利用されている。